『比較民俗研究』15．1997／6

麗江の民間医者と納西族民間の医薬知識

周　星※

1994年9月，10月と1995年9月の二回にわたり，私は中日合同の「西南中国民俗調査団」の中国側団員として麗江を訪れ，「麗江納西族の医薬生活と文化」をテーマとして現地調査を行った。本稿は調査で得た資料に基づき，麗江納西族における民間の医薬民俗知識及び漢方薬に関する問題を考察したものであり，納西文化の研究に新たな視点を提供したいと考えている。

神職と医術の双方に通ずる東巴

納西文化の解釈では，病気になる原因には，天舅の子の柯西柯洛のほかに，更にケガレ，様々な精霊，自然界の基本的関係のアンバランス及び人の行為上の問題（例えば，儀礼を行うための祭具の使い方の誤りなど）が挙げられる。風邪のような軽い病気はもとより，重病ならばなおのこと鬼が原因であると見なされる。鬼は普通戦死や自殺或いは難産死，いわゆる異常死をした人が変化したものである。疾病や災難をもたらす鬼は凶鬼や外鬼，すなわち自分の家とは親族関係のない鬼である場合が多い。疾病の原因が超自然的なものであると言う以上，病気を治す方法としても，宗教という超自然的なものと関係のある方法が往々にして用いられる。それは清の乾隆時代に余慶遠が『維西見聞記』の中で述べているように「病不医薬，延其巫曰多巴禳祝」というものである。病気の原因が複雑で多様であるという理解に対して，それに応じた様々な方法が導き出された。納西族社会ではたくさんの東巴教の儀式が病気を治すために用いられてきた。その中には東巴の祭天儀式を通じたものも含まれる。たくさんの儀式の中で見受けられる「鶏蛋樗杆」(写真1)は言い伝えでは宇宙の始まりの際に天から降りてくる瘟疫を防ぐための道具としても用いられたそうである(1)。

様々な鬼が様々な病気を引き起こすので，治療行為としての祭祀や鬼払いの方法も多様である。東巴の儀式ではよく患者の代わりに木や小麦粉で作った人形を使い，災いを追い払う法術を行う。『請神求神』には，左半身，右半身，体の中央といった病気にかかった部分は，皆人形を身代わりにして，災いを追い払うとある。病気にかかった体の部位によって，病気を分類する観念は納西族の民間に今でも根強く残っている。東巴儀礼では疾病を引き起こす瘟疫を祭祀で用いる羊や鶏に移し，鬼のいる場所へ持って行かせる(2)。又，ある治療儀礼には結びを解くという場面が設けられている。それは患者の首にひもを掛け，東巴がそれを鎌で切り捨ててしまい，同時に松明を燃やして，鬼を追い払うというものである。

東巴は納西社会における重要な宗教的人物であり，一般民衆にとって日常生活の指導者でもあ

※北京大学社会学人類学研究所教授

る(写真2)。医学がまだ発達していない時代や地域においては，東巴の主な仕事の一つは人の求めに応じて病気や災いを追い払う儀式を挙行することである。東巴が一年中に挙行する祭祀活動(3)には固定化した儀式と固定化されていない儀式が含まれる。よく見られる目的は主に平安を祈ることである。固定した儀式といえば，例えば正月の午の日或いは丑の日に集団で行われる村の神を祭る儀式，或いは二月の竜や蛇の日を選んで行われる龍神を祭る儀式といったものである。いくつかの固定化されていない儀式は専ら疾病に対して行われる。例えば，災難と疾病を追い払うための禳垛鬼の儀式は，多くは病気がなかなか治らない時に行われる。東巴経典の『布把過書――求取東巴巫師卜経紀』では，東巴の病気治療における権威性がはっきりと述べられているが，それは彼らが占いを通じて，病気の原因や治療方法を知ることができるからである。また，『什羅立風――丁巴什羅除魔記』では，東巴が儀式で病気を治すことにより，報酬をもらうことの合理性について解説している。報酬をもらうことで鬼にとどめを指すことができるからである。

少なくとも以下のいくつかの特殊的背景によって，東巴は儀式の上で薬の働きをとりわけ重視している。

第一に，東巴文化の特殊な観念の一つは，人やあらゆる事物は，神を含めて，みな病気に掛るので，薬によって治さねばならない。『請神求神』，『休曲蘇埃――神鵬和龍王的闘争』及び『大祭風，迎請精如神』(4)などの経典には神に薬を捧げて，病気を治すという場面が記載されている。民間の儀礼も例外ではなく，例えば，鳴音村では二月上旬の竜蛇の日に祭祀を行う際，主催者は一杯の乳薬水を「龍神」に捧げなければならない。東巴は更に「薬の由来」という経を唱えねばならない。祭風儀式では一杯の薬草水を用意し，乳水といくつかの地元産の薬草とともに山神龍王に薬を捧げる。東巴の和開祥氏の話では，人間は龍王の病気を治す責任があるという。四川省の木里の納西族は婚礼で家の神に薬を捧げ，東巴が山羊の胆を掛けた柏枝に酒を浸し，それを家の神棚に振りまく。胆はここでは長寿の薬の象徴である。

第二に，薬は様々な儀式の中で，常に世界がアンバランスな状態，すなわち病気の状態から再び秩序ある状態に戻すために使われる(5)。人的行為が引き起こしたものも含め，人や自然，超自然世界のある基本的なバランスが一旦破壊されると，人や万物ないし神は病気にかかる。こうした病源説は実際には納西族の人々の世界及び生命に対する観念に根ざしている。大多数の東アジアの民族と同様に，納西族の宇宙観や生命観も二元均衡原理に基づいて，成り立っている。疾病と死亡は，おそらく人的行為がある種の自然現象（神を含む）を犯し，世界の何らかのバランスを崩した結果である。かなりの数の東巴儀式では現存する宇宙の状態と社会の人間関係のアンバランスを立て直し，併せて薬物で治療しようとする。時には神霊でも人の侵犯行為によって病気にかかることがある(6)。その場合，人々は泉のほとりで儀式を挙げ，神霊を慰める(写真3)。時には更に「骨渣魯児」と呼ばれる地元の薬材を捧げ物として水に投げ，神霊を治療することで喜ばせる。

第三に，生と死の両界を超越する薬はあの世にいる死者の疾病を治すことができる。『崇仁潘

迪徹舒 —— 崇仁潘迪尋找長生不老薬』では，薬は死者のために捜したものであり，死者に捧げるものでもある。こうした観念は実際に民間生活の儀式に現れている。麗江の鳴音郷の葬儀では，東巴が死者のために経を唱えて身体にとりついた病魔を取り除くという場面がある。葬送儀礼の供え物の中には「牛羊乳薬水を入れた瓢簞」があり，儀式には更に「病苦を取り除く」ための一節がある。東巴は拖須（五色彩の綢布）を用いて牛羊乳薬水を振りまき，亡霊のすべての病苦を取り除く。東巴が唱える経文の大体の内容は，亡霊の病苦も薬物で治療し，死者のすべての病苦を取り除かねばならないというものである。というのも，その人が亡くなる時にかかった病気は，あの世でもかかるので，儀式の際に薬を捧げなければならないのである。

言うまでもなく，薬は納西文化では様々な基本的意義が含まれている。第一に，大自然中に存在し，大自然を長寿不老にする宇宙薬である。第二に，人類が入手できるもので，死亡を克服できないが，病気の痛みを治療することができる薬である。様々な東巴儀式では薬をつけたり，捧げたり或いは儀式の中で東巴が「薬の由来」を唱える際，薬の属性は溶け合ったり，同一化した状態を実現する。薬は儀式の上では常に象徴性を持つが，実質的な治療効果のない薬という訳でもない。薬の属性の二重性は，東巴の身分がある程度の二重性を持っていることに対応している。

東巴の身分の二重性というのは往々にして巫と医の両役を兼ねていることを指す。東巴は常に巫術で治療するが，同時に医薬を巫術の中で使用し，医薬が巫術行為の中で道具或いは触媒となっている。すべてという訳でもないが，かなりの数の東巴は宗教的人物であるだけでなく，現地の民間社会の中で医者も兼ねている。東巴儀式には様々な象徴的治療行為があるだけでなく，確かに実際に効果のある医薬や治療法もある。経典や儀式の中でも常に薬として挙げられたり，使用されているものは，どの程度民間で実際に使用されているか甚だ疑問である。だが，東巴経の疾病や医薬に関する記載には，あるものは確かに病気を観察したり医療を実践したことで累積した実用的な知識であり，今でも納西族の民間では依然として一定の影響力がある。

東巴文字の「病」という字は人が倒れた形であり，「薬」の字形は「花から汁が流れている」というものである。文字の由来は薬草の汁で病気を治すことにある。ある人の統計によると，不死の薬という神話を除けば，東巴経では180 種あまりの丸薬が記載され，数十種類の薬水及び「灸艾」，マッサージ，「抜火罐」，「扎針」，「挑刺放血」，縫合といった様々な治療法がある。これらの治療法は民間では一部の民間医者が今日でもまだ使っている。多くの東巴経の中で毒薬が触れられている。それに応じて，納西民間でも人々の毒薬に関する知識がとても豊富である。『耳子命』では，広大な高原の甘い薬，苦い薬，薬の花，麹の花や老人が薬草を摘む風景が描かれている。これは納西族の祖先たちがいかにして実践により，薬草に関する知識を蓄積しいったか象徴的に示している。東巴が神を祭る際に捧げる薬である苦楝子，白蚕茧，海螺殻，佛掌生及びその他の儀式にもよく使われている奶渣，奶水，茶水，鹿茸などは程度こそ違うが，東巴の治療行為に用られてきた。東巴である和貴，楊学才両氏の話によると，『祭竜経』に記載されている虎掌参，巻柏，蚕茧，苦楝子，荒米，海螺粉などは今でも依然として民間の医者に使われている[(7)]。東巴経の中にある薬物，例えば金気や銀気の薬水，松石墨玉の薬水などは，今日見るととても不可

思議であるが，菖蒲，姜茶，鹿角，岩羊角などは確かに病気の治療に使える。『考赤紹』では薬酒を作る一つの方法が書かれており，薬酒は今でも納西族の民間でかなり発達している。

麗江ではかつて確かにかなりの東巴が人のために儀式を行うと同時に，民間医者，いわゆる草医も兼ねていた[8]。東巴が儀式の終わった後，患者に少々の薬草を渡すという光景がよく見受けられる。清の道光二十四年（1844年）に生まれ，光緒十四年に亡くなった東翁東巴は，有名な民間医者だった。言い伝えによれば，木土司の夫人が病気に掛かった時に，チベット，ペー，納西，リスの各民族の民間医者に宗教的，医学的診断をしてもらったが，東翁が夫人の病気を治し，褒美をもらった。和偉高は30年間東巴をつとめたが，数百種類の薬草を使いこなすことができ，自分の家でも薬草を植えている。息子の和雲彩も東巴であり，数十種類の薬草を使いこなせる。風邪ならば，菖蒲，生姜，防風，竜胆草，馬鞭草，虎掌草などを与える。胃腸の病気ならば，牡丹根，竜須草，木通，過山竜などを与える。リューマチには茯苓，羌活，独活などを与える。かなりの東巴が一般的な病気を治療し，自ら薬材を捜し，薬酒を作ったり，薬を調合することができる。東巴は巫術と医術の属性によって，納西族の民間では高い地位におかれる。和正才東巴は診察の際にいつも呪いと薬草の両方を使う。和有志東巴は象形文字で草薬の名を記録し，薬を調合できることで，とても有名である。肯命東巴は象形文字で一冊の薬書を書いた。その中にかなりの禽，蛇，鳥類に関する薬物に言及している。和貴東巴は8，90才という高齢で不妊症と小児科の病気治療に長けている。和自安東巴は民間の処方をかなり理解しているだけでなく，人も動物も治療できる。私は汝寒坪で和国柱東巴に伺ったが，彼も治療儀式では民間の薬を使う。今でも民間，とりわけ山奥の僻地では時折東巴に病気を治してもらっている。東巴たちの薬草に関する知識は，東巴文化の中にもともとあった薬物の外に，漢方医薬文化からの「移植」も相当あるであろう[9]。

漢方医薬体系の土着化

納西族が明・清の時代から内地の漢族文化を主体的かつ積極的に吸収したことは，研究の価値がある歴史現象である。今回の調査の収穫の一つは，大来村で麗江盆地一帯が漢化された歴史過程を記載した墓碑を発見したことである。内地の漢文化および漢族移民とともにやってきたのは，文物典章制度だけでなく，内地漢族地区ですでに体系化された漢方医薬の知識体系も含んでいたのである。納西族の民間でも病気を予防したり，治療するための多くの実用的な知識を創造し，累積してきたが，体系としての漢方医薬は，はじめは麗江の外部から伝わってきたのである。

乾隆八年（1743）に，管学宣，万咸燕により編纂された『麗江府志略』の記載によると，清の時代の「楊成初」という人は，「郡人なり。異人の伝授せるに遇いて，歧黄に精し。麗の俗は巫を信じ，医薬を事とせず。成初の指の応ずること神の如く，全活せるもの甚だ衆きを見て，医道始めて行なわる。遠近その名を聞き，延請せらるること虚日無く，屢々奇験を著す。巡道李興祖，称して辺塞の華佗と為す。今の麗の医を業とする者は，皆それを伝うる者なり」と記載している。ところが，漢方医薬文化が伝わった実際の歴史は，恐らく文献の記載よりももっと早い。言い伝

えによれば，洪武年間に楊徳升という人が湖南省から旅の医者として麗江に至り，医術を伝え，主に針灸を行い，主に痧症（急性胃カタルや腸カタルなどの症状）を治療した。その後，木氏土司夫人の難産に臨み，診療が成功した後，木氏に招聘され，とうとう麗江に定住して，現地の薬材を見出し，それを用いて病気を治し，人を救った。痧症に関する一冊の本が伝えられ，清の乾隆年間までに楊成初の子孫十代目までがその医術を継承した。

木土司夫人が難産したり病気をした後に助かった伝説には，様々な異伝があったと思われる。光緒年間に土司夫人が重い病気にかかり，東巴，桑尼，喇嘛，道士（風水師）に見てもらい，最後に塔城の東巴和永公が夫人の病気を治したという。和永公は，前述の東翁と同一人物である。今，麗江東巴文化陳列館には，「医明法精」と題する横額が保存されている。この横額の両側に「欽賜花翎制服知府御世襲麗江府分府木題」，「光緒陸年仲冬月初八日和永公立」と書かれている(写真5)。彼らは争って木土司のためという口実を設けて，実は自分たちの医術が優れていることを宣伝したのだが，このことはかえってまた土司がかつて麗江の医薬文化史に重要な役割を果たしたことを証明している。

前述した東巴経典と東巴儀礼の中に含まれる疾病の認識と医薬の知識を納西族の医薬文化の元からの一部分とするならば，外来の漢方医薬知識体系の吸収は，納西族文化が新しい知識体系を受け入れて取り込み，しかも成功した例と言えるだろう。納西族本来の医薬文化は疾病に対する認識と解釈を含んでおり，漢族文化を背景とした漢方医薬文化及び世界観の間には，明確な衝突は存在しなかった。両者の間には類似点や，あるよく似ている構造性が存在するが，それはいずれも宇宙に対する二元論的解釈に基づいているのである。こうして，漢方医薬文化は速やかに麗江の民間社会に吸収され，納西族医薬文化の重要な構成要素となったのである。それで，漢方医薬を納西族医薬文化とは別個のものと見なすことはできなくなっている。明清以来の麗江納西族社会の重大な文化的変遷に伴い，納西人はそれまでの医療活動の基礎に立って漢方医薬を吸収し，受け入れた。しかも漢方医薬の土着化と自民族化においてかなりの独特な試みを行った。それにもかかわらず納西族医薬文化本来の部分は，東巴文化と民間医療活動の中に依然として残されている。

清から民国年間にかけて，麗江では多くの漢方の名医が続出した(10)。とりわけ現地の納西族から多く輩出されており，漢方医薬文化の浸透ぶりを反映している。和従という人は康熙年間より婦人科と小児科を専門とした。乾隆年間には和旭が医学に専念し，秋には必ず玉龍山へ行って，薬草を摘み，様々な種類を試して，リューマチに効く17種の草薬を見つけ，「虎潜丸」を精製した。その薬の効き目は遠方まで有名になった。同治年間に20代目の子孫である和潮が診療所「寿元豊」を開業した。「虎潜丸」の成分をもう一度調整し，薬草を30種類まで増やし，より効くようになった。光緒の末年には和志敏，民国年間には和集仁という人がいた。その後継者は更に「承徳豊」を開業した。和氏はリューマチ治療に優れていた上に，婦人科にも精通し，特に不妊症の治療に独自の境地を開いた。23代目の和建寅が祖業を受け継いで今日に至っている。民間の言い伝えでは，和氏は木土司の太医（お抱え医者）であった。「当帰」という薬草は和氏の家族が導入し，

秘伝の「虎潜丸」は「当帰」を主な成分としている。「当帰」は本来甘粛省秦州産の「秦帰」を重用してきたが，和氏の薬屋は用量があまりにも多いため，明清の時代に秦州から種苗を買ってきて，玉龍山の裏にある文海山地で試験栽培し，成功した。こうして，ついに「秦帰」と「川帰」それぞれの長所を合わせた「雲帰」を作り出したのである。

張羲という人は道光年間に大研鎮の七一街に「致和堂」という診療所を開業した。彼は外地で医学を学んで，帰郷し，発疹チフスの治療で有名になった。後継者は医療全般を扱うようになり，更に医徳を高め，滋養強壮に精通し，10種類あまりの薬を作った。民国年間には，二つの診療所が設けられ，今日でも後継者がいる。唐仁という人は道光年間に医者の道を引き継いだ。脈拍診断が専門で，依頼されれば，貴賤を問わず，必ず往診した。息子の唐庸は「寿元堂」という診療所を設けたが，彼の特徴はどんな病気を診察治療するにも，まず胃腸を洗うという点で，最初に用いるのが「大黄」である。その子二人も医者となった。唐尚書という息子は年中各村を巡回し，人々からとても歓迎された。呂錫珍は光緒年間に師匠について医学を学んだ。五年後「寿世堂」を設け，貧者の救済を重んじ，人々から「呂神仙」と呼ばれた。彼の弟は「致和堂」で五年間，医学を学び，独立後「采芝堂」を設け，同じく医徳を重じ，村を巡回診療し，人々から「今之和緩」(「現代の和緩」) と書かれた額を寄贈された。二代目の呂向明は祖業を継ぎ，体の陽気を重視し，トリカブトをよく用いた。麗江県漢方医師組合の理事，漢方医薬研究会会長，麗江県衛生工作者協会主任及び麗江県連合診療所主任を経歴した。

これらの納西出身の中医名門では，家業を受け継いた者もあれば他所で学んできた者もあり，漢方医薬体系が納西族社会に取り込まれて行く過程をある程度説明している。彼らは地元の薬草を資源にし，それぞれ独自の家伝処方を世襲の形で代々伝え，専門的分野の経験の形成と蓄積を可能にした。彼らは早くから，県城の大研鎮に専門の診療所を設け，宅診も往診も行い，薬材採集と薬の調剤も同時に行った。

著名な『玉龍本草』は納西族の漢方医者による特筆すべき成果である[11]。言い伝えでは，最初の編纂年代はおよそ明代の宣徳，正統年間である。当時，大研廂文治村の阿日という漢方医は，地元の本草薬物をとりわけ注目して研究し，その家業は18代伝わり，500年あまりにわたって，数百種の本草薬物について記録した。1945年に植物学者の秦仁昌が麗江調査の際にこれらの資料を発見し，ついに薬を鑑別し，薬名を訂正し，『玉龍本草』手稿本を編纂した。表紙には「紹恒堂」，つまりその診療所の名を記した。『玉龍本草』は納西族最初の薬物関係の書物であり，玉龍雪山一帯で産出し，また実際に使われている草薬を記載しており，納西族民間の薬草の単方や験方に含まれる一連の伝統的な薬物も収録している。この本には我が国古代の李時珍の『本草綱目』や，より以前に書かれた本草関連の著作中の記述（例えば，益母草，三七，香薷，黄芩など）が記され，更には明朝の藍茂の『滇南本草』も収録されており，地方の医学が発展する際に，自民族の伝統的な医学の遺産を継承しつつ，内地や雲南の漢族の漢方医学の経験や理論を大量に吸収したことを示している[12]。

麗江盆地における漢方医薬文化の発達は，光緒年間以降徐々に形成されたギルド的性質を持つ

「薬王会」からも見ることができる。言い伝えでは，光緒年間に麗江県の漢方医者と民間医者は，旧暦の5月13日に互いに集会や食事会に招待し，開祖である張仲景や扁鵲，李時珍を祭る儀式を行う。民間では俗に薬王会という。薬王会に使われる飲食費は普通各薬店の主が寄付し，期間は一日から三日の間で，場所はたいてい黒龍潭など風光明媚な所を選ぶ。薬王会の主な目的は親睦交流であり，この集会は1947年に県漢方医組合が成立するまで続いた。その年に漢方医の呂向明が提唱し，8月27日に代表大会を開催し（23人が参加），漢方医組合が成立した。この組合の任務の一つは漢方医の資格を審査し，省政府衛生実験処に報告して，証書を発行してもらうことである。組合の下に漢方研究会が設けられ，当初は会員12人だったが，1950年8月以後，組合が麗江衛生工作者協会に改称し，1952年末までに会員は120人に達した[13]。50年代から60年代の始めにかけては1～2年おきに，麗江衛生工作者協会は会員を動員して，白沙，新団，魯甸などで山に登って薬を採集したが，毎回5～6日間で，同時に薬物に関する知識を交流した。1963年には第二回会議を開き，会員の人数は233人に達し，かなりの農村民間草薬医者が会員として組み入れられた。その後，地方政府が支援する各レベルの医療機構の着実な改善，更には重度なる政治運動の衝撃により，まさしく民間的な性質を持っていた漢方医協会の組織は自然消滅してしまった。麗江盆地の漢方医者が民間医者とともに自発的に組合を組織したことは，ある意味では漢方医薬文化が現地で大きく発展したことを如実に反映しており，漢方医薬文化が現地の民間にすでにしっかりとした大衆的基盤を持っていることを示している。

漢方医薬文化の発達と関連して，麗江は次第に一つの漢方薬材の集散地及び中継地に発展した。麗江は伝統的な雲南――チベット商業ルート上の一大拠点である。漢，納西，白，チベットなどの各民族の商人が頻繁にこの薬材ルートを往来した。清末から民国年間にかけて，大研鎮及び周辺の市場で納西族，白族，漢族がチベット族の人々と交易した薬材には，主に黄連，貝母，茯苓，冬虫夏草，鹿茸，麝香，熊胆，蟒胆，虎豹皮骨，香菌，白生，青皮，茜草，紅花，催生石などがある。その際，アヘンの交易も一時繁盛した。1850年代にアヘンが雲南に伝わった後ずっと市場を賑わした原因の一つは，多くの地方でアヘンを一種常用かつ万能の薬と見なしてきたことにある。民国年間に麗江では約1200あまりの店が出現し，ある店はチベット商人から薬材を購入し，それを内地へ転売し，ある店は山奥へ行き，山民から薬材を低価格で購入する。また，ある店主は山を買い，人を雇って貝母或いは他の貴重な薬材を採る[14]。大研鎮では昔端午節になると，街のあちこちに薬を売る屋台が設けられ，各種の薬材が並び，盛況を呈した。端午節は現地の民間では伝統的な衛生節或いは薬材節とも言えよう。今日でも麗江県城の街では依然としてたくさんの漢方薬屋台があり，販売されている薬材の種類は非常に多く，内地でよく見られるものや地元の特産品やチベット地区からのものなどもある。商売の状況も悪くはない。これらの薬草屋台は国営薬材会社の管轄外で，純粋に民間ないし個人的性格を持っており，ある人は自らが医者や経営者として山へ行って，薬材を採ってきたものもある[写真6]。麗江自体が薬材を豊富に産出し，高低差による気候の違いが数多くの漢方薬材にとって絶好の生育条件を与えている。玉龍雪山だけでも薬材は500種類あまりある。1986年の漢方薬材資源調査によると，麗江地区には全部で

2016品種の薬材があり，『中薬大辞典』に記載された5767品種のうち35％を占めている。国が重点的調査を行った395品種の中，麗江地区全体は256品種があり，調査対象の64％を占めている。

納西医薬文化が漢方医薬知識体系の伝播及び吸収に伴って重大な変化を遂げた後，今世紀には西洋医薬が導入され医療体系が確立したことも，納西族の伝統医薬に大きな影響を与え，新たな社会文化の変化をもたらした。西洋医薬の導入は民衆の医療選択の範囲を拡大させ，納西族の医薬生活を豊かにし，客観的に見れば，東巴文化の医薬観念や漢方医薬の伝統をかなり排除した。漢方医薬と西洋医薬の間には哲学的背景や文化伝統の上で，かなり大きな違いがあるが，次第に共存し，補いあって，多重的な医療衛生制度体系を形成していった。民衆の医療に対する選択，利用，態度から見ると，現在の状況は大まかにいって城鎮に住む民衆は西洋医薬に頼る傾向が多く，農村は漢方薬や薬草を使う傾向が比較的多い。西洋医薬は公的には高い地位を占めるが，漢方や薬草は民間に根差した強固な基盤を持っている。中高年の人々は漢方や薬草を使う傾向があり，若者は西洋医薬を使う傾向がある。一般に急病，重病，珍しい病気の場合は西洋医薬に頼るが，慢性病，よくある病気，日常生活上の軽い病気などは漢方或いは薬草及び民間療法で治療する。比較的普遍的な言い方では，西洋医薬は症状をおさえることができるが，完全に治らない。病源を完全に治したい場合は漢方医薬に頼るしかない。漢方医薬に従事する人を含め，人々は異文化に属する西洋医薬に対して，むやみに抵抗したりしないが，心の奥ではやはり漢方医薬の方を身近に感じている。

麗江の民間草医

麗江民間ではかなりの草医が活躍している。草医は民間医者とも言うが，専業ではないので，生計に影響しない。診断料金を取らないが，お礼だけを受け取る人もいれば，病状が治らない場合は金いらずということもある。これは漢方医との大きな区別である。民間医者は大体僻地の田舎や山村で活躍し，自ら独学した場合が多い。日常生活から模索し，体験したことや本人が長い間，病気にかかり，自分の体験した医療知識を生かし，医者になったのである。それに対して漢方医の場合は城鎮で開業するか或いは国が経営する医療機構で働き，多かれ少なかれ正統な医療知識を学んだことがあり，民間医者より専門な知識を身に付けている。医学知識は家伝や学校教育による専門分野，病院から得た臨床経験である。一方，民間医者の場合は殆ど一つの処方で一種の病気しか治らない。漢方医は漢方薬体系の導きで数多くの処方を作れるし，いくつかの専門を知らなければならない。薬草は漢方薬のような完全な哲学基礎と理論体制はない，医薬に対するロジックにも本には載っていない，研究者が生活に関わる知恵から発見するものである。調査によると，民間医者や漢方医とも病気を治療する過程では西洋医薬を絶対的に排斥しないが，彼らはよく西洋医薬で治らない，失敗した事例によって自分の能力を確かめる。しかも秘密で各種の薬草を取りに行って調剤する。

民間医者は漢方医者と同じ文化の道筋を辿ったが，具体的に彼らの知識源とレベルは多少異なっている。民間医者は主に本人や親族の病気体験から得た知識に頼りながら身近にある野草な

どを薬にし，治療過程の中から，日常生活でよくある疾病の処方を積み重ねてくる。民間医者は自ら新鮮な薬草を求めるが，漢方医の場合は薬材会社や薬店から薬を購入する。一部分の民間医者も漢方薬書からある程度の医薬知識を吸収するが，主に民間にある様々な伝統的な方法に基づき，しかも自らの実践した結果に結びつけて医者になったのである。彼らは地方や自民族の薬草知識を持ち，発展させていくのである。治療することは実験性を持っているので，地元の漢方医に新たな経験と知識を提供することができる。民間医者が持った医薬知識のかなりの所は地元の人々もよく知っているが，その大いに宣伝する家伝の処方のことはあまりよく追究されているわけではない。にもかかわらず，家伝の処方は依然として人々に信じてもらえるのである。これらの秘密の処方は普通，男性に限って或いは一世代おきに伝える。秘密を保つためには，薬草を採りに行くのも人気のない朝，夜の時間帯にし，或いは薬の種類を全部粉状に加工する。また，ある説によって秘密の処方が知られたら，効果がなくなってしまうという。

民間医者になるのは，認定機関の許可を得ることはいらないが，地元の人々に認めてもらえば，その評判が広がる。ところが，村民から民間医者と言われる人は往々にして自分は民間医者ではないと否定する。私は天紅村で約70才になる和氏という男性(写真7)を数回訪ねたことがある。和氏により語ってもらった内容は以下の通りである。

「私は昔よく病気にかかったが，貧乏で薬を買えなかった。仕方なく，自分で山へ行って，薬草を採り，そのお陰でいくつかの難病を治す処方を見つけた。主に労傷病（過度の疲労によって起こる内臓の病気(訳者註)）を治す処方であった。私が病気になった原因は以前，よく外で宿泊し，食事し，湿気の多い所にいるので風邪を引き，胃腸炎にもなった。今，私は冷たい水を飲まない。冷たいおかずも口にしない。かなりの医者に見てもらっても治らなかった。その後，人の処方をひそかに学んで，やっと病気が治った。……たまたま他人が薬を求めに来るが，私はお金を貰わない。主に打撲傷，労傷病を治すが，今，年をとったから，もう止めた。現在自分の庭にいくつかの一般的な薬草を植え，それを酒に入れ，薬酒を作る。家族が風邪や頭痛にかかる時にこれを飲ませる。病院へ行かなくていい。……この村では冷熱病について治療できる人は少なくない。ここの海抜は高いから，部屋の中のいろりの火は年中消さない。そうすると，外は寒いが，中は暖かい。寒い所，暖かい所に頻繁に出入りすると病気になりやすい。熱病の場合は肉が食べられない。もし食べたら，もっと重くなる。冷病は熱病より簡単に治り，卵や肉類を食べてもいい。男性は女性より病気にかかりやすい，なぜならば，男性の場合はよく食べるし，タバコ，酒，茶も好きで，外での行動も多いから，濡れている地面に長い時間坐ると，胃を冷やす病気，リューマチにかかりやすい。食べ物には冷たい性と暖かい性という分類がある。例えば，ジャガイモ，インゲン豆，大根，酒などは暖かい性であるが，かぶ，苦瓜は冷たい性に属する。果物は大体冷たい性である。夏に肉を食べすぎると，体に悪いが，逆に冬に冷たいものを控えるほうがよい。夏には熱病にかかりやすいが，冬の場合は涼病にかかりやすい。薬草の中に木本科に属するものは熱性で，草木科は涼性である。苦味があるのは涼薬で，甘味があるのは熱薬，補薬である。熱薬は胃病に，涼薬は一般に風邪，熱に効く。藍色や紫色の花が咲く薬草はほとんど毒薬である。

麝香は様々な病気に効き，涼薬と言われている」。

和氏の話から分かるように，疾病と医薬知識の関係は非常に複雑であり，薬草で病気を治療する経験の他に，日常生活から得た知恵も重要である。和氏の庭ではたくさんの薬草が植えられている。種類は川芎，大黄，附子，木香，重楼，七葉一枝花(写真8)，接骨丹，打不死(写真9)，百合，酸漿草，狗屎花，薄荷，香薷などがある。これらの薬草は自家用以外，他人にもあげる。調査の対象になってくださった話者の民俗知識はまちまちだが，麗江農村の場合は薬草に対する認識はかなり普遍的である。私は数回に渡って塔城郷塔城村下爬一社の和姓青年を訪ねた。以下は彼の話によって，まとめた内容である。

「納西族民間では一般的に病気を以下のように分類をする。一，頭痛，四肢の痛みを『風病』と総称する。風病を治療するには一つの処方がある。それは約20種余りの薬草の成分が含まれるが，主な薬草は藤本植物である。二，体の中央部にある病気，例えば，心臓，脾胃，肺，リンパの痛みなどを『心口痛』と総称する。これらの病気を治療するには消食健胃薬という薬を使うが，この薬は胃病にしか効かないので，全快する可能性が限られている。三，体中の下の部分にある病気，例えば膀胱，腎臓炎，赤痢，前立腺炎などを『下腹部痛』と総称する。この類いの疾病を治療するための薬剤は主に消炎，解毒，熱を下げる薬剤である。四，『婦人病』，主に止血，血の循環がよくなる，血を解く薬を用いる。五，子供の病気を『生虫子』と総称する。多くの子供が消化不良にかかり，寄生虫が生じやすいため，虫下し薬と消化を助ける薬を与える。例えば，苦楝子，木香など。六，老人病を『衰老病』と総称する。この病気には特に効く薬はないが，老人にとりのスープをたくさん飲ませるとよい。老人に関する具体的な疾病も前述した体の各部分による分類法でよい。よく見られる病気では風邪，胃腸病，リューマチがあるが，老人の場合は特にリューマチにかかる人が多い」。

「我が村では現在3人の草医がいるが，一人は家伝で，祖父から学んだそうで，リューマチを治すのが専門である。70年代の農村合作医療の成果としては民間医者を普及させたことが挙げられる。当時各生産隊では4，5人を山へ，薬草を取りに行かせた。診察料はただ銭五分だけである。今活躍している一部分の現役民間医者は当時，農村で農業に従事しつつ医療衛生業務に携わった人である。塔城郷では約45才の和医者が四代目の後継者で，整形外科に関する病気はほとんど治療できる。薬の成分は絶対秘密で，新鮮な薬草を潰して卵の白身の中に入れ，布で傷口に四十九日間に湿布したら，骨折を治せる。巨甸の漢族医者は木の根っ子で骨折した所を包む。骨折の程度によって細い根っ子や太い根っ子を使う。処方も秘密である。見させないように薬草の根っ子を庭に埋めている。他人に絶対教えない。根っ子の皮をきれいに剝いでから，塩を入れ，粘りが出るまで潰して，骨折の所に塗る。これらの民間医者は診療費を徴収しないが，お礼を受け取る。処方は秘密で，娘には伝えない。塔城村の和毛義という人はリューマチが専門で，彼の診療方法は尿の様子から判断し，内服薬や外用薬，抜罐（吸引療法の一種）の治療方法を同時に行う。よく効く。中甸，チベット地区の人も診療に来る。彼は内服用と外用の薬は同じものを使用するが，外用薬の場合はやや強めで，内服薬は薬草を煎じて飲む。約20種類の薬草で調剤したもので非常

に飲みづらいものである。和氏は8年前に亡くなったが，彼の孫がその処方を継承した」。

「納西族民間の薬は主に汁状で飲む方式が多い。しかも，熱いうちに飲まなければならない。西洋の薬を飲む場合は普通食物について制限はないが，民間の薬草を飲む時には特に様々な食物の制限にこだわる。例えば，炎症の時に唐辛子や豆腐，魚を食べてはいけない。リューマチには牛や羊の肉，豆類，老いた雄の鶏肉はよくない。散剤の薬もたくさんあるが，汁状の薬より少ない。散剤は水と一緒に服用する。錠剤の薬は少なく，大体薬の粉に蜂蜜を加え，丸くする。他には塗る薬と外用薬がある。この種類の薬は大体薬に卵の白身を入れる。これは民間の知識としては卵の白身が皮膚を治す効果があると信ずるからである。筋を捻ったり，骨を折ったりする場合は涼性薬を使う。また傷口を洗う方法を兼用する。これは薬を水に溶かし，煮てから，傷口の所を上から下への順できれいにする。もし，下から上へにすると，黴菌が心臓に入りやすくて，危険である。一般的に内服用の薬は無毒性で，外用の薬は毒性を持っている。納西族民間に使われている薬酒の種類は多く，主に体を補い或いは血行をよくし，経絡を通じさせるものである。ヨモギの枝に酒をつけて，捻った手や足の所に塗る。子供は長時間歩いて足が疲れたら，瓦を火の中に入れて真っ赤になるまで焼いて，酒を瓦の上にかけ，その蒸気で足の疲れや痛みを回復させる。更に少量の酒を飲むと疲れが取れ，体を補う。しかし，飲みすぎは禁物である。酒が薬草のよさを出させる。血液の循環がよくなると，血の再生により治療効果が早くなる。薬酒の内服用のものは無毒で，外用するのは毒がある。民間草医は毒のある酒を自分の知り合いではない人に与えない。野性動物の骨は大体リューマチに効くが，酒につけなければならない。狼，狐，狸，熊のような動物は殆ど野外で生活するので，生命力は人間より強い。海抜4000メートル以上で生活している動物の骨は一番よい。民間治療法の中にはまた抜罐子，マッサージ，刮痧の方法がある。水を沸かし，罐を湯の中に入れて，素早く罐の口に冷水をつけ，熱い気と冷たい空気から圧力を生じさせ，その罐を患部に被せると落ちない。もし患部が膿により麻痺した場合はナイフで切り血を出し，抜罐の方法で毒を取り出す。水罐の方法は火罐のとは違うが，主に打撲，捻挫傷，リューマチの痛みに効き，いずれも患部を固定させる方法である。捻挫をした場合はどの患部でもまず伸ばし，その後マッサージをする。納西族の民間ではツボについてあまり知らないため，どの所でもツボのように見ている。マッサージは鎮痛，血行の循環をよくする効果がある。高熱や急性胃腸炎，盲腸炎にかかった場合は，腕（男左女右）の忌門のツボの所で小銭や堅い物でけずって，皮下出血させることによって，体の中の火や血圧，体温を下げる」。

「私は座骨神経の病気にかかった。去年，中甸病院で注射してもらい，薬も飲んだのに，病状が重くなった。病名は重リューマチという。1977年，維西へ行って，ある納西族のラマ医者に見てもらった。医者が処方には20個くらいの卵の白身を入れて，混ぜてから腿の患部に巻いて貼り，又，飲む薬をもらった。50日間を経て，病気が治ったが，家に戻ったら，再発病した。その後，チベットへも行って，医者に見てもらって，針灸を施してもらい，錠状のチベット薬を飲んだが，効き目はなかった。仕様がなく，自分の作った毒薬酒を試した。命を賭けたもんだ。結局，一つ大きな秘密を発見した。それは藤本植物の中の大藤樹がリューマチを治せるとわかった。経絡を

緩め，血行をよくする効果がある。私が作った処方の中に，毒性が強い薬草は26種類ある。例えば，三分三は麻痺に，ヨモギは鎮痛に，草烏は血行をよくし，毒を解くのに効くなど。これらの植物を酒に浸す以外に，患部に塗ることができるが，毒があるため，内服できないし，傷口の所にも塗れない。これは死に至る危険性に絡むから。私が作った薬は鎮痛性が強く，病をよく治す。私はかつて維西で約80元の医薬本を買った。現在約400種類の薬草を使いこなせる。時々，親戚や友達に頼まれ，彼らのために病気を治す。わが家の薬酒では各種類の藤本植物を浸している。それぞれの植物にはそれぞれの効果がある。例えば，黒骨藤，大血藤，過山竜はそれぞれに骨，血，筋に効く。私の処方は主に黒骨藤を使い，リューマチを治し，血行をよくし，経絡を通じさせ，止血する効果もある。これは全部私自身が開発したものである。他人の所でもあるかどうか分からない。座骨神経痛について何人もの患者を治した。ところで，私は診断料金をもらわない。医者ではないから。妻もかなりの民間療法を知っている。例えば風邪や痢疾，胃痛，小児のけいれん，消化不良，栄養不良などの病を，自分の庭の野生薬草で治すことができる」。

この話者はかつて小学校の校長先生であった。大きな鍋で桜樹の葉，竹葉，松の毛を赤い砂糖と一緒に煮込み，流行性風邪や脳膜炎を予防するために学生に飲ませた。彼は漢方医薬知識の影響を受けたり，長期的に納西族民間生活の中から知恵を吸収した。従って，自分の身につけた疾病や医薬知識に関する認識に対して整理し，帰納した。例えば，疾病と治療方法の分類などである。

当然，民間医者と自称する者もいる。大研鎮の街で屋台で薬を売っている者が私に次のように教えてくれた。長年，雪が積もっている玉龍山では水母雪蓮花，錦頭雪蓮花などがあり，それは血を補い，腎臓を補い，精力をつけ，リューマチを治す効果がある。こういうことは漢方医薬の本にも記載してあると言う。このような屋台式薬屋は大研鎮では少なくない。彼らは客に無料で様々な知識，情報，アトバイスを提供するが，いずれにしても薬草を売り，利益をもうける手段である。昆明民族村の中の納西村でも医者を開業し，薬草で病気を治療する場所を設けている。私は四方街の「黄氏中草薬診所」(写真10)の主人にインタビューをしたことがある。主人の自己紹介によると，四方街で診療所を開業して，12年目である。若い時に四方街の薬局で見習い徒弟として働いたが，その後，地区の医薬会社に入社し，退職まで勤めた。退職してから診療所を兼ねて薬局を開業した。魚眼草，鳳尾草で肝炎を治療するのが主人の専門だそうだが，捻挫を治す処方も持っている。但し，絶対に他人に伝えない。ところで，私の実地調査やインタビューに答えてくれた草医の中では，72才の和士秀氏が一番有名である。

白沙郷三元村では「麗江玉龍雪山本草診所」を経営する和士秀氏(写真11)は，よく自己宣伝する民間医者である。和氏は若いころ南京で英語を勉強したことがあるが，病気のため，学校を止め，自分で漢方医薬を学んだ，また長い病気のために病に詳しくなった。彼は一般的な薬草で病を治す。様々な急性や慢性の消化系統と呼吸系統の疾病を治すことができると言う。例えば，気管炎，胃病，結核症，喘息，腸炎，肝炎，座骨神経痛，リューマチ，腎臓炎，ノイローゼ，婦人の諸病などである。診療方法は服用薬のほかに，針灸，物理療法，マッサージなども兼用する。

約2000あまりの薬草を調剤できる。また，西洋薬と漢方薬などおよそ数百種も揃えていると言う。来客に無料で一種の薬草保健茶を出す。この茶は6種類の薬草で作ったもので，コレステロールを低下させ，胃腸にもよさそうなものである。和氏は一部分の病気を治療するために西洋医薬も使っている。自ら雪山の近辺へ薬草を取りに行ったり，自分の庭には様々な常用薬草を植えている。かなりの旅人が彼の薬を飲んで，胃病や湿疹が治ったと言う。衛生局は彼を「郷村医士」として招聘した。ところが，衛生系統の専門家は和氏のことを単方医者であると言う。何故ならば，彼は一つの処方で一つの病気を治すだけで，例えば，彼によってよく使われている隔山消は消化に効く胃の薬である。当地の気候風土になじまない外国人旅人によく効いたから，有名になったのである。

生活の知恵と民俗の医薬知識

女性で草医になる者は少ない。だが，これは女性が医薬に対する民俗知識を欠いているということを意味していないと思う。むしろ，男性の方が認められやすい，或いは話者を頼むときに性別に片寄りすぎただけかもしれない。ある話者から，男女を比べたら，女性の方が男性より，薬草を好むと教えてくれた。インタビューして印象に残ったことから言えば，男性の方が薬酒や熱補酒に関心を持つが，女性は主に婦人科，小児科などの民間医療法に関する知識を持っている。

既に納西族婦女における民間医薬と保健知識について調べた専門家がいる(10)。調査結果によると，成人の納西族婦女は平均約30～40種か50～60種類の薬草を知っているが，少数の人は百種類以上の薬草を使いこなせる。端午節，十五夜の日の頃に，納西族婦女が山や野原へ行って薬草を取る習俗がある。婦女たちは熱をさまし，毒を解し，炎症をおさめる薬について大体自分で調剤できる。彼女らによく使われている薬草には，玉龍帰，月月紅，小茜草，小伸筋草，小血藤，大紅袍，大薊，大白芍，大血藤，大白七，三分三，三角楓，三棵針，土黄白，土三七，土甘草，川芎，千年艾，千針万線草，万生菌，馬蹄草，馬鞭草などがある。自らよく治すことができる病気は風邪，咳，頭痛，肺炎，肺結核，急慢性胃腸炎，血吸虫病，けが出血，捻挫，打撲傷，ヘルニアなどである。ほかには生理不順，更年期，おりもの，子宮出血，こしけに，生理痛，妊娠期のつわり，習慣性流産，産後回復，母乳不足，乳腺炎，子宮脱垂なども治療できる。特に子を産んでから後に，段々いくつかの薬草の処方を覚えてくる。例えば，下痢，けいれん，はしか，百日咳，おねしょ，口角びらん症，耳下腺など小児に関する病気である。

私は玉龍村で和姓の女性保健員にインタビューしたことがある。和さんはこの村の個人経営の医者である。主に漢方と西洋医薬を併用する方式を用いて，婦女や子供の病気を診療する。村内の生育計画の業務や産前産後の検査，児童の予防注射などもやっている。彼女の話によると，産婦の体の状況は衰弱の時に，益母草を飲まなければならない。この薬草は薬材会社が売っている。湯でもどしたら，すぐ飲める。産後出血する場合は千鶴草と水で煮て，楡を焼いた灰を加えて飲む。風邪の場合は漢方医者の話によると，熱症や寒症に分けられ，病状により馬鞭草，香薷草(写真12)，金竹葉，車前草などを病状に応じて分量を決めて使う。車前草は下痢や利尿に効く。かぶや木通

は利尿の作用がある。地元の白菊花と金銀花はともに涼性の薬である。山に行ったら隔山消の根が拾える。赤の根と白の根はどちらも消化を助ける効果がある。岩菖蒲草の根を切って日陰で干し，粉状にしてから飲むと消化を助ける。水の流れによって流れ出された柳の根は「順水魚」言い，炎症を抑える効果がある。蒲公英も同じ効果がある。はしかの時に観音柳を水で煮て，その水で体を洗うとよい。

具体的な例をそれぞれ出したら，確かに個々人によって民間医薬知識に対する認識はある程度の差があるが，私は納西族民間の人々が医薬知識に対して常識としての感覚を持っていることに驚いた。これは人々の日常生活から生まれてきた知恵の一部分に違いないが，長期的に漢方医薬文化に影響されたものと地元の薬草資源の豊かさのお陰と思われる。まさに納西族の諺にもあるように「ぽんと座ったら，三種類の薬草に当たる」。麗江の町と村のどの家庭へ訪れても，どの成人に訪ねても，薬草に関する異なる情報や生活知識が得られる。これは彼らの生活の一部分である。人々が病気になったら，自らの庭から野生薬草を取って飲む。農民や城鎮に住む人々はいずれも多少自分の庭に薬草を植えている。客観的に言えば，70年代の合作医療「群防群治，大採，大種，大制，大用中草薬的群衆運動」(16)には，漢方薬に関する展覧や漢方医薬の学習班，処方・薬を献ずる活動などを行ったことは，かつて麗江民間に漢方医薬知識の普及に影響を与えた。1971年に内部発行のミニ版『麗江中草薬』には，272種類の当地で手に入りやすい「常用中草薬」及びよく見かける疾病を治療する単方・験方・処方，凡そ800あまりが記載された。ここで明らかになることは漢方薬草はその時代にかつて特別に重視されたということである。

麗江地区薬品検査所は1978年に麗江県の納西族医薬について調査を行った。53種類の納西族常用薬を整理し，納西語の発音や意味を付けた。その中には動物薬4種類，植物薬49種類がある。植物薬の中には草本35種，藤本2種，木本（灌木を含む）10種，菌類2種がある。この中の6種類が栽培薬で，残りは全部野生薬物である(17)。これらの納西族常用薬とこの後に整理された約120に及ぶ民族薬物及び約300単本・験方の中には，当地の他の民族によっても使用されているものが少なくない。

私の限られている理解から，麗江民間層における医薬民俗の特徴について，以下の通りにまとめられる。

第一に，薬草は動物薬と鉱物薬より多い。動物薬は主に家畜の胆や様々な動物或いはその骨などを浸して作った酒である。汝寒坪村にある農家の柱に掛けられている豚の胆は風邪に効く涼性薬(写真13)であり，歯痛，喉の痛みにも効く。また，失神或いは失恋したための心理的不安定の場合は蛇の胆を鎮静剤として使える。岩羊の胆を乾燥させて粉剤にして飲むと鎮静，動悸の加速，鬱病に効く。熊胆の粉剤は胆結石に効く。子供が驚かされたら犬の胆の粉を水と一緒に服用すると治る。けいれんを起こした時に麝香を水に入れ，濡れた紙で巻いて火をつけ，さらに車前草の葉で後ろの首に貼って灸をすると治る。水牛骨髄の酒はリューマチに効く。金沙江岸の河谷の河卵石の下にある百足を生きているまま酒に入れ，飲むと麻痺が治る。殺虫剤にも使える。但し，この酒は外用で内服はできない。患部の外側に塗ると，傷が徐々に治る。その解毒性は非常に強

い。百足を香油に浸したものは虫に刺された所に効く。よく言われた言葉では「牛には牛黄があり，犬には犬の宝があり，鶏には鶏金があり，豚には朱砂がある」。牛黄は神経を安定させるために使い，鶏金は瓦の上で焼いて粉にして飲むと，消化を助け，胃によい。豚胆の中の朱砂は心臓病に効き，鎮静剤として使われている。兎の脳汁は天麻と鶏の卵と一緒に蒸して食べると，ノイローゼに効く。胆のほかに，大部分の動物薬や肉類は熱性の温補薬に属する。蛇肉はリューマチに効き，体に滋養分を補う。猿肉もリューマチに効くが，熱性が多すぎる。ある肉類や骨は必ず薬草と一緒に服用しなければならない。例えば，奶参の根を豚足と一緒に煮て食べると，むくみに効く。茴香の根，牡丹皮はとり肉，豚足と煮付けると，年寄りの人の膀胱によく，栄養を補給し，腎臓を補う。附片は肉，骨と一緒に煮ればまた一種の熱補薬であり，体の衰弱に効くが，毒性があるので調理法の誤りにより，中毒する可能性がある。馬鹿の生殖器と鹿の筋を一緒に煮て食べると，精力がつく。両棲動物の雪魚も精力をつける効果があると思われている。女性の不妊症は体が冷やされたせいで，肉類を多食するほうがよい。鳴き始めた雄の鶏の肉を細かく切り，酒を少し入れ，炒めて食べると，体温が上がる。

鉱物類薬は主に化石で胆や腎臓の結石を治療する時に使う。土から掘り出した白石をいろりの中で真っ赤になるまで焼いて，水にいれて飲むと，鎮静，痛み止め，利尿に効く。子供が驚かされ，緑の便が出た時に金の指輪，石斧（納西人が天から落ちてきた斧という）を真っ赤に焼き，水を加えて飲むと鎮静する効果がある。蚯蚓がはって通った土は胃薬であり，粉にして水の中で煮て沈殿させてから飲む。腹の中にガスが溜まる時，いろりの底の熱い灰を水に入れ，沈殿させてから飲むと消化を助け，胃に効くが，飲みすぎると腸を傷める可能性がある。竈の真ん中の土及び壁の土で水で溶かすと，涼薬になり，内服したら嘔吐と食べすぎに効く。麗江では何ヵ所かの自然の鉱水があり，様々な胃病に効く。

第二に，納西族民間の薬酒は進んでいる。使い方には，服用のもあれば外用のもある。様々な動物或いは骨を酒につける以外に，朝鮮人参（精力を補給する），天麻（年寄りが気と血とも不足の時に使用），枸杞（腎臓を補う），小紅参（滋養分を補給し，精力をつけ，夢精衰弱に効く）なども酒につけられる。ほとんどの薬酒は熱を補うものである。薬酒はリューマチ，骨折，外傷，麻痺などの症状に効く。その原因は経絡を緩め，血行をよくし，血液の循環を加速させる作用があるからである。リューマチは寒気が体に入ったことによってかかった病気であり，熱性の補酒を飲まなければならない。だが，適量がポイントである。パパイヤ酒はリューマチに効く。雲南松尖を酒につけたものは打撲傷に効く。過山竜薬酒は捻挫を治せる。接骨草の根はリューマチの薬で，潰してから白酒と混ぜ，患部に湿布する。病状によって，薬酒につける薬草も異なる。消化不良を治すための酒は隔山消，花椒寄生などを使う。涼性に属する梅を酒や蜂蜜につけると，心臓病に効き，肺や喉を潤し，咳を止め，痰を取り除ける。紫蘇を梅酒につけたら，虫よけや殺菌する効果がある。

第三に，植物薬の中では草本が一番多い。それに対して藤本や木本，菌類薬の方が少ない。薬草では体温を下げ，毒を解し，炎症を抑えるなどの涼性薬がもっとも多い。香薷草，馬鞭草根葉

を水で煮込むと風邪に効く。馬鞭草のつゆは赤痢を治す。翻白葉を赤砂糖と一緒に煮込むと，赤痢にも効く。苦胆草は百合を加えて蒸し，蜂蜜と混ぜると咳止めの薬になる。生姜，茶，砂糖を水に加えて煮るとせきを止め，炎症を抑え，風邪に効く。子供の口内炎は地紅豆を水で煮込んで飲むと治る。魚眼草の汁は肝臓炎に効く。紫薇花はリューマチに効く。竹菌は炎症を抑える。百合は肺を潤し，土牛夕草はリューマチを治す。夏苦草はリンパ結核に効く。蒲公英は母乳を促す。岩菖蒲は涼性で，気を通じ，消化を助け，脾臓を丈夫にする。大紅袍根葉で長時間で煮込んだつゆはチフスを治せる。お湯に金梅花を入れると涼性薬になり，脾臓，胃を丈夫にし，熱を下げ，喉を潤す。乾燥した梅は山椒と混ぜてお湯を注ぎ，飲むと虫下しの作用がある。白刺尖は熱を下げ，毒を解する。柑橘は涼性で，脾臓，胃を丈夫にし，咳止めの効果がある。蜜柑皮は生姜を加えて長時間煮込んで飲むと風邪や頭痛に効く。竹葉草根球は長時間煮込んで飲むと膀胱炎に効く。鬼針草は胃を丈夫にし，消化を助ける。隔山消は消化を助ける。婦女は産後に益母草で煮込んだつゆを飲むと病気を予防できる。唐辛子は食欲不振に効く。香芫果は咳を止め，その葉を蜂蜜につけて焼くのも同じ効果がある。漬けた胡桃を蜂蜜，玉蜀黍の砂糖と一緒に煮込むと，肺を潤し，痰を取り除き，咳を止める効果がある。梅の木の皮を水で或いは金銀花尖と一緒に煮込んで飲むと風邪に効く。白いパパイヤを水で煎じて飲むと赤痢が治る。成熟する前に落ちてきた桃は解毒薬の一つ調剤である。山椒を嚙んだら，歯痛が止まる。コノテガシワの葉っぱをお茶に入れると，高血圧を治すが，蜂蜜に混ぜると喉を潤し，水にいれ長時間煮込んで蜂蜜を加えると，天然痘及び喉の痛みが予防できる。桜樹の葉で長時間煮込んで飲むと，流行性感冒及び急性伝染病を予防する。庭にある馬蹄草はマラリアにきく。陶器のつぼに入れ，煮込んで一回飲むだけで治る。気を失った時に百檀を焚いて燻す。民間医者は麻疹を治療する時に櫟樹或いは麻櫟から取ったキノコでスープを作って患者に飲ませる。植物薬の中のあるものは体を補う薬である。例えば，精力をつける草木は小紅参，小茜草などがある。天麻を細かく切って，バター，卵と混ぜて蒸すと，脳を補う効果があり，ノイローゼに効く。多くの果物は薬として使える。例えば，梨は生で食べると消化を助ける。冬梨は熱性だが，煮たら涼性に変わり，せき止めや肺を潤す効果がある。梅ジュースは車酔いの薬で，神経を鎮静させる。海棠の実は肺を清め，利尿し，特に子供の小便が黄色ぽっい色になる時や尿道が炎症を起こす時に飲むとよい。膀胱結石の際，長期間飲み続けると，結石がなくなる。海棠の実の食べ方は多様である。例えば，煮る，生のまま，乾燥させる，お湯に入れる，長時間水で煮込んで砂糖を入れる，干すなど(写真14)である。松の実は肺を潤す。生のごまを潰してお湯にいれて飲むと，腸を潤し，便秘を治せる。烟樹を燻した汁は赤痢を治せるが，飲みすぎると中毒する可能性がある。茶も薬として使え，涼性薬である（納西人は普段紅茶を飲まない)。茶を小さな黒い罐に入れ，いろりの上でじっくり煮込んで，塩を入れたコップに注ぎ，飲むと元気が出るし，体内の熱が下がる。濃茶は頭痛に効き，清涼効果がある。茶は毒を解せる。薬物中毒したら濃茶を飲むと治る。薬を飲んだ後，茶を飲むと薬性を解する。子供が食あたり或いは熱病になる時に淡い緑の茶葉を嚙ませればよい。竹の葉は毒を解することができるため，一般の薬の中に竹の葉を加えたら薬の毒素を分解することができる。

第四に，山区での生活条件が厳しいために，よく見られる外傷やリューマチなどの疾病に対しては，民間の人々は様々な治療方法を知っている。蜘蛛の巣を傷口に置いたら止血する効果がある。頭の毛を燃やした灰を傷口に置くと，同じく止血できる。外傷では野坦子草を口の中で細かく嚙んで傷口に置く。藤本植物は筋をいためてしまう種類の疾患などに効く。漫佗羅草は足首を挫いた時に使う。未熟なざくろの実はアレルギー皮膚病を治せる。実の皮を水に浸し，患部に塗る。独定子，三分三，虫竜などは皆外傷止血の薬である。炭を真っ赤に焼いてから粉にし，傷口につけると早めに治る。華山松の松ぼっくりから出る松の油は止血し，刀傷に効く。松油を紙の上に塗って傷口に貼ることができ，或いは膿を抜き出すことができる。九重光は涼性薬であり，煮込んで飲むか，或いは患部を洗うかの方法で治療に使うが，民間の諺では「九重光を知っていると，三代出来物を知らず」と言う。桃樹の葉は殺虫効果があり，細かく潰して傷口に巻くと，蛆を取り除ける。薄荷草を汁が出るまで潰し，虫や蚊に刺された所に塗る。野麻は手足の麻痺に効き，洗うか或いは湿布する。耳屎，牙食屑は傷口に塗ると炎症を抑える。キセルの灰は蛇に嚙まれた傷口に塗ると，毒の固まりが取り除ける。

第五に，当地ではまだかなりの分類しにくい処方がある。言い伝えによれば，塔城近辺に薬草で「迷薬」を調剤する人がいる。相手に飲ませたら，一日中自分のことばかりを思ってくれる。大樹の枝から粉を採集し，河の水で溶かし，或いは汗と調剤すると，解薬として使える。故郷を離れ，気候風土になじまない場合には家の水筒の中の垢を，粉にして水に溶かして飲む。子供が喉が痛いために話せない場合は鍋底の煙油を水に溶かして飲む。鍋底の煙油を冷水で溶かし，焼き上がった紅炭を入れ，その水を飲むと喉の痛みと風邪に効く。鉄の棒を真っ赤に焼いて虫歯の所に置いたら，歯痛に効く。目の中に異物が入ったら母親の乳汁を目尻につけると，異物が早く排除される。豆腐は熱性で，天痘然を早めに出させるため，発病から三日目に食べると効果的である。冬に青松の枝の上に結露して，透明な松脂（松毛糖）ができるが，それを飲んだら心臓病や老年性肺炎に効き，肺を潤す効果がある。三才以下の男童の尿は産婦が暖かい内に飲むと大量出血に効く。子供の尿はまた打撲傷を治すが，いずれも暖かい内に飲むと血行によく，経絡を通じさせる。石を真っ赤になるまで焼いて布とヨモギの枝で巻いて，その上に立つと踵の痛みに効く。性交過度のため，腰が痛くなる時，納西語で表現すれば，腰の霊が抜けたと言うが，これには消炎や利尿，痛み止めの薬を飲むとよい，例えば，茴香根である。ほかには何かを食べてから病気になったならば，そのものを黒炭のように焼いて水に浸し飲むと治ると言われる。「原湯化原食」（ある物で作ったスープは，その同じ物を溶かすことができる）という俗信があったようである。

第六に，納西族における保健習俗と麗江民間における生活の知恵は，殆ど当地の医薬民俗知識に密接な関係があり，特に地方性を持っている。柏木の葉で燻すのは汚れの侵入を防ぐためであり，その香りには消毒効果がある。立夏の節分の時に竈の灰を家の回りに撒き，毒虫の進入を避ける。ヨモギの煙で蚊を追い払う。納西族婦女の民族衣装「披星戴月」（背中に羽織っているマントー訳者註）は実際に腰や肩を保護し，風避けの効果がある。結婚する際に相手が病気したこ

とがあるかどうかを調べる。妊娠前後には性の禁忌があるが，産後は主に母体を補養する風俗，母乳哺乳，児童沐浴などがある。食物で治療することや食物で補う方法のほかに，様々なタブーがある。例えば，熱病の場合は豆類や唐辛子，干し肉，酒などが禁物である。唐辛子は殺虫することができるが，取りすぎると，炎症を引き起こす。栗は熱性の食物で，食べすぎるとお腹が張るなど。これらの問題をもっと発見し，整理しなければならない。

上述した医薬民俗の知識は，漢方医薬に記載された内容と似ているか，或いは多少増加，変化，改造されたものである。薬性によって解釈すると，漢方薬に一致するかもしれないが，具体的な使い方は多少微妙に異なっている。民俗知識の特殊属性があるため，どれが正しいかどれが誤っているかを判断し難いものである。納西族民間における医薬民俗知識は上述したものより，遥かに豊かで，今後もっと緻密な調査や研究を行わなければならない。

民間医薬文化の文法

フィールドワークから明らかになったことは，納西族の人々は民間における医薬知識を普遍的に知っているが，医薬民俗文化の角度から見ると，この中に他民族との共通点があることである。我々にとっては，一民族の独特な文化創造と，その文化と他の文化の間の共通性や交流状況を知ることは，言うまでもなく同様に重要な学術発見である。納西族と同じく彝語支に属する彝族でも，祖霊に薬を捧げる儀式を行い，供え物に薬が置かれている[18]。納西族の医者は脈や舌を観察し，病因を探すが，これは漢族医者がよく使う診療法である。又，尿を観察するのもチベット族医者がよく使う診療法である[19]。納西族の診療法は漢族とチベット族の両方の医学を吸収し，そこから自らの医学的特徴を形成したのである。チベット族の薬は粉剤が多いが，漢方薬の方は汁の薬がよく使われている。それに対して，納西族の民間医薬は両方の特徴を持っている。

もっと重要な原因は漢文化の要素が納西医薬文化に対して影響を与えたことかもしれない。麗江盆地の人々が曾て端午節の日に摘んだ草は，ヨモギと同じ効果でいずれも薬草として使えると信じていた。十五夜に風邪に効く薬草を月餅と一緒に食べる習俗がある。中元節に鬼霊が特に多く，馬の足跡にも鬼霊がいて，病気を起こしやすい。そのため，納西族民間では薬を十字路に撒いて通る人に踏ませ，それによって病魔がふみにじられる或いは病原を連れさって行かせる習俗があった。赤ちゃんが夜中に泣き止まらない時に「天皇皇，地皇皇，わが家には泣き虫がいる，立ち寄る君子に読んでもらいたい，ぐっすり眠れるよう」と書いた紙を道の入口に貼る。麗江においては，納西族や漢族，白族のどの出身のものが，民間医者の知識の組み立てに対してそれぞれどの程度に影響を与えたかどうかについては必ずしも明らかではない。

納西族の人々の常識観念の中には，漢族或いは他の民族でよく知られている医薬文化や日常生活の常識も存在している。例えば，「水土」という意識があるが，これによると気候風土になじまないことが疾病を引き起こす原因の一つであり，当地でかかった病気は当地の薬草で治療するほうがいい。旅人は当地の薬の方が病気が治りやすい。薬を使用する時に「毒で毒を解する」という説がある。「薬」，「毒」の共通観念は，漢やチベットの医学にもある。納西族民間でも多種

類の毒薬を混ぜる，或いは毒性の強い薬で難病を治療する方法がある。更に類感巫術理論のように薬草を使う。例えば，さいかちで目を治療する。なぜならば，さいかちの形は人の目のようである。死者がもし盲人であるならば，さいかちを捧げると，それは死者が生まれ変わる時，ものが見えるようになる。食物によって体を補うのは納西族民間では非常に普遍的な観念である。例えば，腎臓の痛みに豚の腎臓を食べる。脾の痛みに豚の脾を食べる。牛肉を食べたら，体力がつき，心臓を食べると，心臓を強め，肝臓は肝臓を補う。

民間医者の知識背景や民衆の薬草知識に対する普及程度，及び民間の疾病医薬原理に対する解釈から見ると，納西族民間に存在しているものは，内地漢族地区のものと基本的に同じ，或いは類似する。哲学的背景から言えば，それは漢方医薬知識系統の，ある内在規則に属している。すなわち納西医薬民俗文化の「文法」は内地漢族地区のそれと基本的に一致している。

調査によると，巨甸地方にある揚子江に沿う納西村落では，人の体を「火体」と「水体」に分ける民間認識がある。火体者は肝臓が弱く，熱を生じやすく，タバコ，酒，落花生，向日葵の乾燥した種などを食用すると，病気になりやすい。一般的な症状としては首筋が痛く，歯痛などが現れる。涼性薬で治療を受ける。一方，水体の者はタバコや酒，茶などは大丈夫だが，寒病を生じやすく，温補薬を飲まなければならない。ところが，火体や水体のいずれの体質にせよ，必ずしも年齢と関係あるわけではない。現地調査の結果によって，麗江における納西民間医薬生活及び文化の基本的文法を以下の通りに整理できるだろう。

人	季節	食物	疾病	薬	治療法
火体	夏	熱性	熱病	熱薬	体を温める
水体	冬	涼性	涼病	涼薬	熱を取り除く

上述した規則についての具体的な解釈は以下の通りである。人体は火体と水体の両方に分けられ，火体は熱病に掛かりやすく，涼性の薬で治療しなければならない。逆に水体体質の人は冷病に掛かりやすく，熱性の薬を使う。普通，夏には熱病に，冬には寒病に掛かりやすい。特に季節の変わり目の際に注意しなければならない。食物も熱性と涼性に分けられるが，いずれにしても病気になる原因や病気を治す効果を持っている。熱性の食物は火体の人にとっては病気になりやすいが，水体の人にとっては病気を治せるものである。逆に涼性の食物は火体の人の病気を治せるが，水体にとっては病気になる原因である。食物の薬物が同類という観念は当地の人々にとって普遍的な考えである。食物と薬物の間にはある程度互いに交代できる関係を持ち，食物の属性には薬用の価値があると思われている。疾病も熱，冷に分けられる。関係する飲食と薬の使い方の原則は，いうまでもなく熱性食物や熱補薬は冷病の全快に利する。涼性食物や体中の熱を取り除く薬は熱病の全快に利する。薬を飲むこと以外，納西民間では他の治療法も上述した規則で分類する。例えば，刮痧，抜罐子は体中の熱を取り除き，体温を下げさせる方法だが，薬酒は体温を暖めるものである。これらの規則では民間生活の知恵と医薬民俗文化のロジックが一致する。人々の飲食では肉や野菜，辛いものや甘いもの，冷たいものや熱いものなどを工夫し，また季節

によって着物や飾り物を交換することを含め，すべて二元世界観に基づき，成立したのである[20]。食補や薬膳などの文化現象も，この文法の中から解答が得られる。疾病の発生や全快するかどうかのすべての玄妙な道理は，この二元の中和均衡と転換によって解釈できそうである。健康という意味はすべてのものが均衡し，秩序がある状態を言うが，疾病は世界或いは人体の均衡，秩序がばらばらになり，或いは破壊されたことを意味する。それに対して，全快することは均衡状態が再び回復されたことを表明する。人自身（火体或いは水体），外部世界（季節天気など）及び食物や薬物を通して成立した人と世界の間の関わり，治療行為はすべてこの規則のロジックの中で自由に行われる。ここで明らかなことは，このような「文法」は我々漢民族の民間文化に現れたことと，基本的に一致していることである[21]。従って，我々にとっては熟知され，親しみを感じさせることである。

もちろん，上述した形式や文法はすべての納西族の多元的医薬文化現象を包括することはできない。ある意味では研究者が調査に基づき，得た一部分の成果にすぎない。実際に存在している他の分類原則の下では，例えば病気の患部から分類すれば，疾病を「風」（熱風，冷風）病と機械性損傷などに分類したら，上述した規則で必ずしも解説することができない。ここで明らかにしたことは納西族医薬文化が単一性ではなく多様性を持っていることであり，例えば多重分類を共存させていることである。上述したのは規則とは言っても多少体系化され，影響力や浸透力がややあるものにすぎない。

納西族医薬文化と周辺の各民族文化との様々な関係について述べてきたけれども，納西族の伝統医薬の独特な創造性を否定するわけではない。逆に納西族医薬文化の基本背景について全面的，客観的，明確な理解を提供したい。納西族医薬文化は確かに独特な特徴がある。例えば，ある一部の納西族漢方医者や民間医者は外傷，骨折などの治療について針灸，外用，内服三種類の方法を兼用する。骨損傷の治療過程はまず，針灸で患部の血液を正常に循環させてから，外用薬を与え，最後にけがの程度によって内服薬を飲ませる。骨折の所にはもし砕けた骨や欠けた骨があれば，新しく出た松明を患部に入れ，補強すると，約20～40日間で治る。この治療法では針灸，麻酔，病理，解剖，薬物，手術など様々な知識や臨床経験が含まれている[22]。ほかには体の各部分の異常変化現象によって病気を診療する方法も使われている。例えば経絡，脈絡の運行規律によって抜火罐などの方法で病気を治す。東巴文化の一部分である原生態医薬文化を継承する以外に，数百年来，漢方医薬知識体系は麗江において本地化され，内化され，納西文化の構成部分となる歴史過程に従って，ついに当地の納西人自らの独特な薬草知識が生まれた。

麗江納西族民間における疾病に対する認知と医薬文化の基本レベルは，およそ(1) 納西族先祖の早期疾病に対する認知及び医薬観念をその内に含み持っている東巴医薬文化，(2) 本来は漢文化のもので，納西文化に内化され，すなわち地方化や本民族化された漢方医薬体系，(3) 納西族民間では普遍的に存在している民間医者，薬草の伝統習俗とかなりの量の民間単方と験方，(4) 今世紀から伝わってきて，日増しに影響を与えた西洋医薬制度などを包括している。さらにその中には(5) チベット医薬伝統の影響を受けたものも有りうる。これらのレベルの区別や初歩的な

説明から，納西文化史の累積過程にとって，比較的に整った印象が与えられるであろう。

無論，麗江納西人にとって医薬生活及び文化は一つの総体であり，それを分類し，分析する目的は麗江納西人が利用できる医薬文化資源の多様性を提示するためである。ちょうど東巴医薬が納西医薬文化の中の一部分であるにすぎないように，東巴文化もまた総体性を持つ納西文化の組み立ての一部分にすぎない。長らくずっと，東巴文化は特に重視され，学術研究や納西文化を建設するのに東巴文化が全体の納西文化にとって代わる傾向があった。これでは豊かな納西文化の多様性や東巴文化以外の納西族民間にある多くの重要な文化創造をやや無視したと感じる。納西医薬生活及び文化の初歩的な探求を通じて，この独特な側面から納西文化研究にとって，いくつかの新しい前景が提示できるであろう。

一般の人々が病気に掛かって困った時に，実際に様々な選択がある。病人が神様に祈るとともに，更に現実的な医学治療方法を求めているかもしれない。神様に祈ることは個人行為であり，また共同体の集団行為も言える。神職の人を頼む場合に，道士，東巴，僧侶，喇嘛などのいずれも選択することができる。現実に病気の痛みを解決するのは，薬草で自己治療或いは民間医者，漢方医者，東巴医者，西洋医者に見てもらう方法が選択できる。政府側は中，西医術の両方を結びあわせることを提唱するが，医療衛生機構に属する医者さえ東巴を信ずる者がいる。話によると，麗江県では国家公務員医務関係者と漢方医者，民間医者の総計は約千人に上る。だが，盆地周辺の山奥では相変わらず一部分の東巴医者が現在も活躍している。西洋医薬は城鎮だけではなく，一番基本層の農村まで浸透している。例えば，玉龍村では二つの個人経営の診療所があり，漢方医者，西洋医者が一人ずついる。彼らの開業証書は衛生局から発行されたものである(写真15)。病院へ行かなくても村内で点滴や注射することができる。ところが，人々は病気になったら，まず自分で薬をさがし，治らない場合は医者や東巴を頼む。白沙郷の各行政村では一人ずつ保健員が派遣され，国家からある程度の補助金が出て，彼らは村民に注射することができるし，またいくつかの薬草や西洋薬を使いこなせる。出産を手伝いする場合は１元の料金を取る。ただし，村内婦女の出産は殆ど姑自らが赤ちゃんを取る場合が多い。人々は病気の時に往々にし三多廟へ行って，病気が治るように祈る。不妊症の人は病院へ行く人もいれば，胎盤を求めて服用する人もいる。以上は麗江納西族民間における医薬生活の実際の状況である。医薬民俗文化を理解するには，医薬生活の総体性を重視しなければならない。麗江納西族民間では，人々は外来医薬の影響を受けたが，医薬資源に対する選択は他の民族のような直接巫医から西洋医薬を求める転換ではなく[23]，巫医，自助式，薬草，漢方医，西洋医の順に求めていく。また医療資源の利用が更に拡大されたにもかかわらず，自民族文化の選択も放棄していない。

麗江納西族の知識層では実際に東巴医学を基礎にし，当地民間の固有の漢方薬草知識に結びつけ，納西族の病因学，診断学，治療学を整理し，納西医学を創立する，すなわち納西民族医学体系を成立させる活動をしている。県衛生局の某納西族専門家が言うには東巴医学の基礎は五行式の理論で，病因について様々な独特な解釈がある。陰陽失調，五行の乱れ，鬼霊によって感染や炎症を起こすことなどを含めている。民間の漢方薬草や単方，験方は難病――乙型肝炎，腎臓

衰弱，慢性気管支炎などについての治療方法では見通しがある。それに対して民間薬草は未だに発展する途上の段階である。納西薬の中ですでに数十種類が国家薬典に入れられ，県立病院の整形外科医者も納西の方法で治療を行うことなどもある。ここに明らかなことは納西医学の体系は努力によって創立されたということである。確かに納西医薬生活及び文化からいくつかの納西に独特なものを羅列することは難しくない。まず東巴文化の中の医薬遺産を基礎として，完璧な医薬知識体系や医薬学術制度を支えられるかどうか，これがまず初めの問題である。次にこのように深いところまで漢方薬草知識に浸潤された地方や文化の中において，漢及びチベット医薬の体系以外に，納西医学が発展する空間があるかどうか。また，納西族民間医薬生活から，わざわざ納西の独特な医薬知識を，既に納西文化の重要部分と考えている漢方医薬と分離することが必要かどうか，できるかどうか。納西医薬文化の中に当地や近辺のその他の各民族と共用する成分をいかに断定，処理するかなどの問題もある。これらの問題はすべて納西医薬体系を成立するためには解決しなければならないのであるが，現段階ではまだ適当な解答がない。

麗江納西族の医薬生活と文化の以上に述べた初歩的探求から，更に深く納西族文化の全体及び本質を理解するためのいくつかの啓示を提供できたのではないかと思う。医薬文化も含まれる納西文化は著しく多元一体の特徴を持っている。積極的に様々な異文化の要素を吸収し，参考にし，内化し，しかも当地民衆の生活に溶け込ませて，徐々に地方や本民族文化の特色を持つ新しい質が創造されたのである。これは納西文化のもっとも魅力的な本質である。納西文化の全貌であるところの，多元的特色及び民族間の文化の交流によって発展資源を獲得することに堪能であること，積極的に自己民族の文化空間を拡大する素質を持っていることなどを理解したいならば，もっと広い民族と民族が関係を取り結ぶ社会の範囲において納西文化が実際に発展して来た文化史の過程に十分着眼しなければならない。　　（翻訳者：筑波大学地域研究研究科　蘇素卿）

註：

1　［美］孟徹理著，和虹訳「納西族的宇宙哲学和宇宙志」『玉竜山』1994年3期。

2　雲南省少数民族古籍整理出版規劃辦公室編『納西東巴古籍譯注（三）』雲南民族出版社，1989年，109頁。

3　李静生「東巴在一年中的祭祀活動」，麗江県政協文史資料委員会編『麗江文史資料（第十一輯）』，1992年。

4　雲南省少数民族古籍整理出版規劃辦公室編『納西東巴古籍譯注（一）』雲南民族出版社，1986年，294頁。

5　［美］孟徹理（C．F．Mckham）「納西宗教綜論」，白庚勝，楊福泉編訳『国際東巴文化研究集粋』雲南民族出版社，1993年。

6　習煌華「東巴教儀式中的結束語」『東巴文化報』，1994年9月総第二期。

7　和志武，郭大烈「東巴教的派系和現状」，郭大烈，楊世光編『東巴文化論集』雲南民族出版社，1991年。

8　参閲李国文著『人神之媒――東巴祭司面面観』第八章，雲南民族出版社，1993年。
9　安東尼，杰克遜著，楊国才，何昌邑訳「納西族研究的過去現在和将来」『民族学』1992年2期
10　呂学文「麗江中医世家簡介」，麗江県政協文史資料委員会編『麗江文史資料（第十二輯）』，1993年。
11　趙浄修「玉竜本草――納西族的一部中草薬書」，麗江県政協文史組編『麗江文史資料（第四輯）』，1987年。
12　郭大烈「納西族文化史」，李徳洙主編『中国少数民族文化史』遼寧人民出版社，1994年。
13　毛竜発，呂学文「解放前後麗江医薬活動雑記」，麗江県政協文史資料委員会編『麗江文史資料（第十二輯）』，1993年。
14　許鴻宝調査整理「麗江県大研鎮解放前的商業情況」『民族問題五種叢書』雲南編輯委員会編『納西族社会歴史調査』雲南民族出版社，1983年。
15　和鴻昌，和躍雲，和瑞生「納西族婦女的伝統医薬保健知識調査」『民族学』1995年3期。
16　雲南省麗江地区革命委員会生産指揮組衛生組編『麗江中草薬（内部発行）』「編後記」，1971年。
17　『麗江医薬（納西薬専輯）』，雲南省麗江地区薬品検験所，1979年。
18　馬学良『雲南彝族礼俗研究文集』四川民族出版社，1983年，223～262頁。
19　趙璞珊『中国古代医学』中華書局，1983年，298頁。
20　唐有為「麗江歴史上幾種伝統菜譜」，麗江県政協文史資料委員会編『麗江文史資料（第十二輯）』，1993年。
21　李亦園「致中和――論伝統中国郷民的基本価値取向」，北京大学社会学人類学研究所編『東亜社会研究』北京大学出版社，1993年。
22　郭大烈「納西族文化史」，李徳洙主編『中国少数民族文化史』遼寧人民出版社，1994年。
23　簡美玲「疾病行為的文化詮釋――阿美族的医療体系與家庭健康文化」国立清華大学（台湾）碩士論文，1994年。

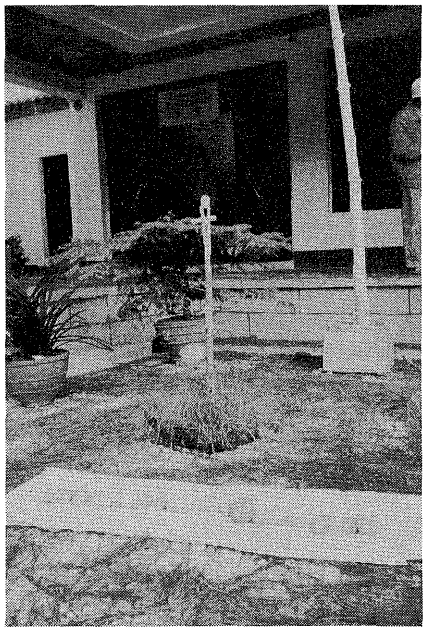

写真１．鶏蛋櫸杵

写真２．和聞祥東巴

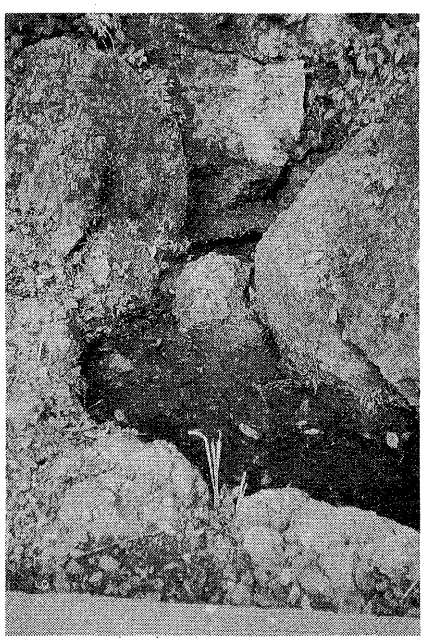

写真３．泉辺の祭儀

写真４．大来村の墓碑

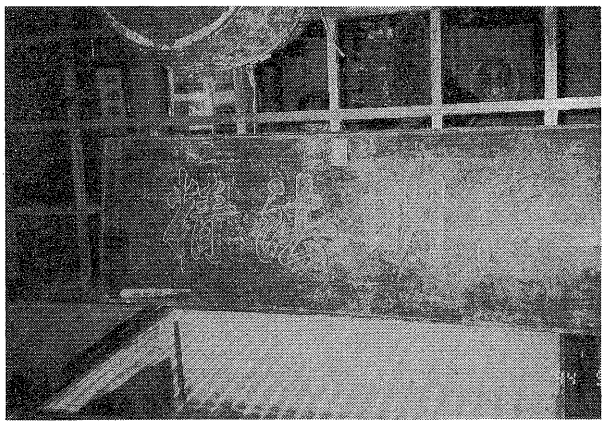

写真５．「醫明法精」

写真６．大研鎮の漢方薬屋台

写真７．天紅村の民間醫者と彼の薬草園

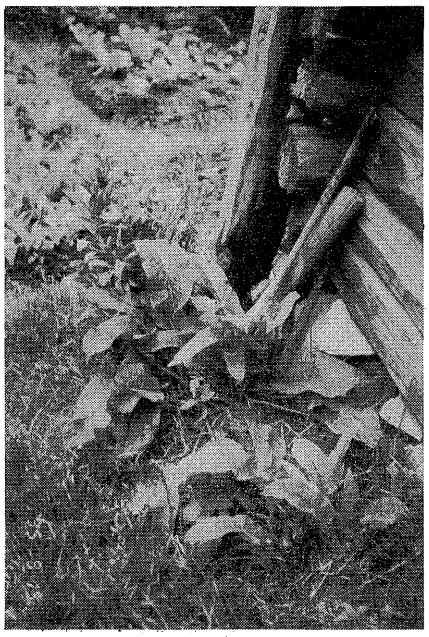

写真８．薬草：土紅花と紫花地丁

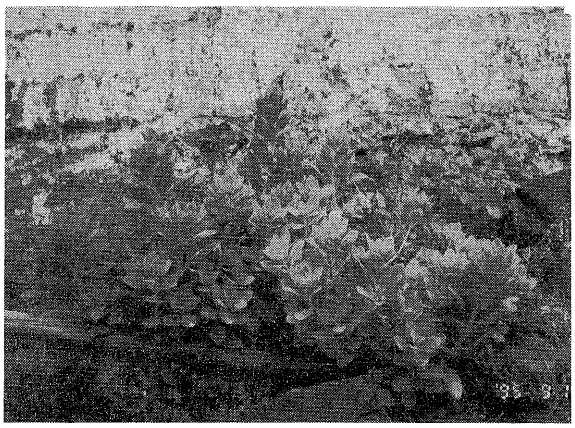

写真９．薬草：打不死

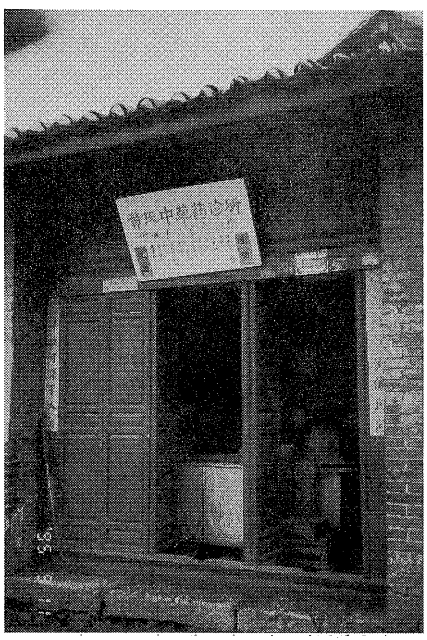

写真10．大研鎮の黄氏診療所

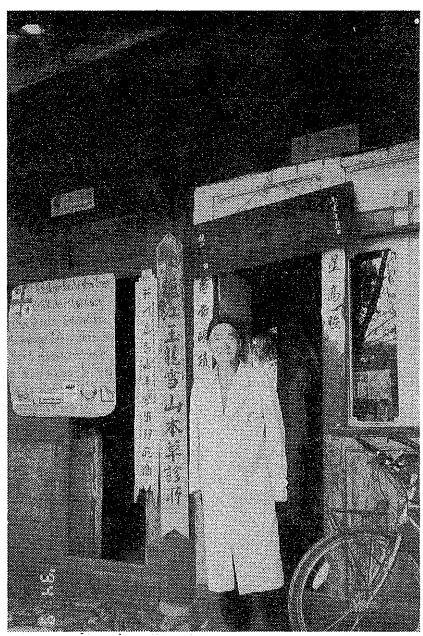

写真11．民間醫者和士秀

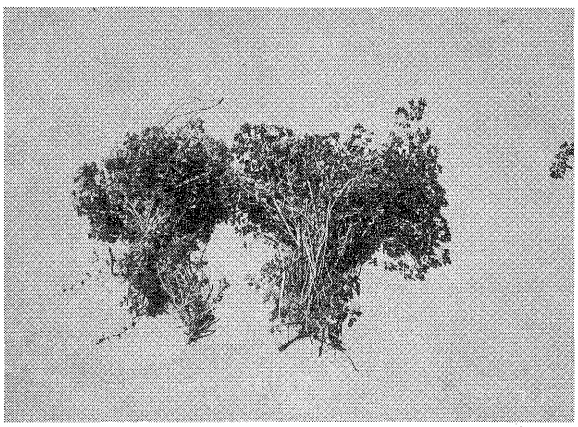

写真12．薬草：香薷

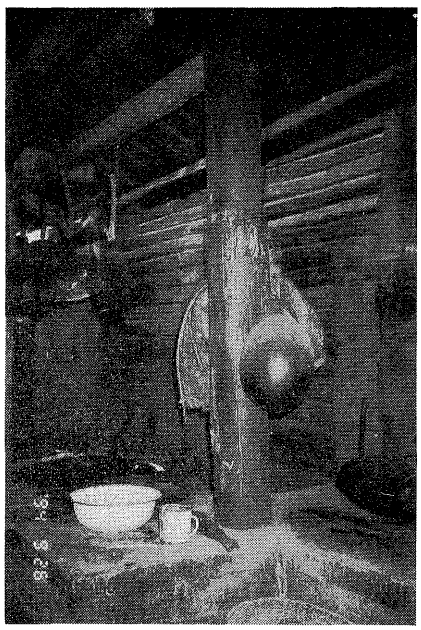

写真13．農家厨房の柱にかけられている動物薬

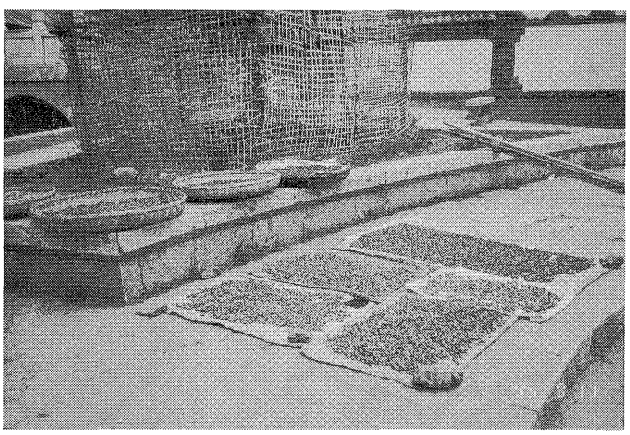

写真14．大研鎮居民が加工した干し海棠巣

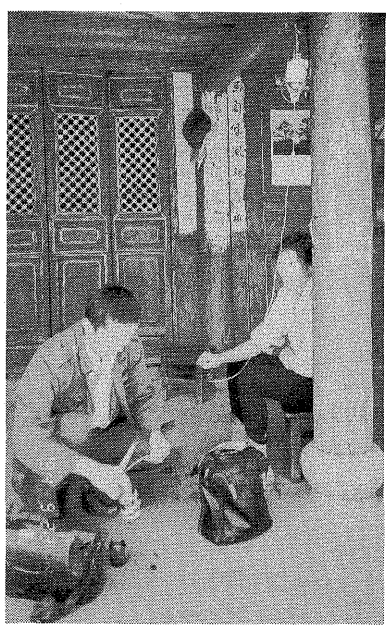

写真15．村内で点滴を行う